Hokkaido University News

北大時報

令和6年
5

No. 842　May 2024

春の叙勲に本学から2氏
盛山正仁文部科学大臣が本学を視察
札幌キャンパスが自然共生サイトに認定

No.842 令和6年

目 次

5

盛山正仁文部科学大臣が本学を視察

新入留学生オリエンテーションを実施

全学ニュース

1 春の叙勲に本学から2氏
4 盛山正仁文部科学大臣が本学を視察
5 新入留学生オリエンテーションを実施
6 インターンシップ＆就職活動スタートアップガイダンスを開催 ～令和6年度キャリアセンター就職ガイダンスがスタート～
7 韓国のソウル大学校と少子化対策連携を強化
8 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
10 「国際雑談～Be the Global Chatter～」を開催
11 「社長になって経営してみよう！社会とお金について学ぶ『親子の経済セミナー』」を開催
12 きたキッチンで「北海道大学フェア」を開催
13 札幌キャンパスが自然共生サイトに認定
14 ESG（Environmental, Social, Governance）情報の収集及び企業・団体や機関投資家との交流を目的として「日経ESG経営フォーラム」に参加
15 「夢ナビ講義」において新たに研究者8人の講義動画を公開
16 人間知・脳・AI研究教育センターと大学院教育推進機構リカレント教育推進部がリカレント教育プログラム「AIと人間社会」を実施
17 「国民との科学・技術対話」支援事業　アカデミックファンタジスタ　2023年度は31名の教員が13校に向けて講義を実施
18 大学院生向けPBL「未来志向ワークショップ～札幌の気候変動と脱炭素アクション～」を開催
19 教養深化キャリアデザインカフェ「地域から未来を拓く～『地域で働く』選択とその魅力」を開催

部局ニュース

20 水産科学研究院・水産科学院・水産学部及び北方生物圏フィールド科学センターが知内町と三者連携協定を締結
21 第4回 北の森林（きたのもり）サイエンスCAFEを開催
22 環境健康科学研究教育センターが令和5年度後期「社会と健康」修了生にディプロマ授与
23 脳科学研究教育センター脳科学専攻の開講式を挙行

研修

24 令和6年度法人文書管理に関する研修（初任職員向け）

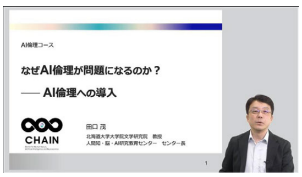
表敬訪問 25

人事 26

インターンシップ＆就職活動
スタートアップガイダンスを開催

「国際雑談～Be the Global Chatter～」を開催

きたキッチンで「北海道大学フェア」を開催



リカレント教育プログラム「AIと人間社会」を実施

表　紙：札幌キャンパスが自然共生サイトに認定（関連記事13頁に記載）
裏表紙：キャンパス風景㊿　情報基盤センター北館（北11条西5丁目）

全学ニュース

春の叙勲に本学から2氏

この度、本学関係者の次の2氏が、令和6年春の叙勲を受けることについて、4月29日（月・祝）に発表となりました。

勲　　章	経　　歴	氏　　名
瑞　宝　中　綬　章	北海道大学名誉教授	斉　藤　昌　之
瑞　宝　単　光　章	元 北海道大学病院看護部長	髙　橋　久美子

各氏の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、授与されたものです。各氏の受章にあたっての感想、功績等を紹介します。

（社会共創部広報課）

斉藤（さいとう）　昌之（まさゆき）　氏

感　想

この度の瑞宝中綬章の受章、身に余る光栄に存じます。ご推薦・ご尽力くださった方々に心からお礼を申し上げます。

私は、北海道名寄市郊外の辺鄙な所で生まれました。電気が届いたのは小学校に入る直前で、初めて電灯がついた瞬間のまぶしさ・感動は今でも覚えています。そのせいか、子供の頃から電気に関することが好きで、鉱石ラジオを作ったりエジソンの伝記を読んだりしながら、漠然と研究者に憧れていました。北海道大学に入学してからも電気関係の学科に進むつもりでしたが、恵迪寮で同室だった先輩から植物が光合成でデンプンを作る仕組みすら解っていないという話を聞いて、急に（分子）生物学に興味が湧き、理学部化学科に進みました。卒業論文のテーマは光合成ではなく筋肉アクチンの重合反応でしたが、八木康一先生のご指導で初めて研究の楽しさを感じました。その後、大阪大学大学院理学研究科、同大学蛋白質研究所、愛媛大学医学部を経て、1989年に北海道大学獣医学部に赴任し、研究の楽しさ・喜び（そして苦しみも）を味わい続けることができました。

私の主な研究テーマは、栄養エネルギー代謝と褐色脂肪組織（以下褐色脂肪）に関するものです。褐色脂肪は脂肪エネルギーを熱に変換する特殊な組織であり、哺乳動物の体温調節に寄与しています。私は、褐色脂肪と肥満の関係について、動物丸ごとから細胞分子レベルまで幅広く実験研究をしました。しかし、その成果を発表すると、医学系の方々から「それは動物の話で、褐色脂肪が存在しないヒトでは無意味ではないか？」と指摘されるのが常でした。これに対する回答を得たのは、本学を定年退職する直前の2006年2月で、がんの画像診断法として普及し始めていたFDG-PET/CTを用いて私自身と大学院生が被験者となり、ヒトでも褐色脂肪が存在し実際に機能していることを発見しました。従来の定説を覆す画像を見た時の興奮は今でもよみがえりますし、その後の国内外の研究展開に大きなインパクトを与えたと自負しております。まさに研究の醍醐味に他なりません。

これまでの研究活動を通じて、とても大切と思うのは「人との出会いと繋がり」です。指導して下さった恩師の先生方や同僚、国内外の研究者ネットワークは勿論のこと、多くの学生や大学院生の新鮮なエネルギーは常に刺激的で貴重でした。彼らと真摯に向かい合い切磋琢磨することは大学院教育そのものであり、その経験・知見に基づいてこその学部教育と思い務めたつもりです。巣立った学生・院生が国内外で活躍しているのを見聞きするのは、本当に教員冥利の極みです。

褐色脂肪に関する研究は、現在も共同研究者のご協力を得ながら本学や天使大学などで継続しております。今回の受章はこれまで「出会い繋がった方々」のお陰です。改めて感謝するとともに、これからも当該研究領域と本学の教育・研究の発展に少しでも貢献できればと願っております。

功績等

斉藤昌之氏は、平成元年3月北海道大学獣医学部教授に採用され、家畜生化学講座を担当されました。平成7年4月には、北海道大学大学院獣医学研究科教授に配置換となり、比較形態機能学講座生化学教室を担当され、平成18年3月定年により退官されました。

教育面では、長年にわたって学部および大学院における獣医学の教育に尽力し、多くの有能な獣医師・人材を育成しました。特に、大学院において同氏が直接指導した博士

課程学生は19名にもおよび、獣医学・生命科学関連の大学教授・教員や研究者として、国内外で活躍中です。

研究面では、動物のエネルギー代謝調節機構、特に褐色脂肪組織と肥満・代謝病の関係について先端的かつ独創的な研究を展開しました。褐色脂肪組織は熱産生を担い哺乳類の体温調節に寄与することが知られていましたが、同氏は褐色脂肪のもつ脂肪エネルギー消費機能に着目し、その分子制御機構を解明しました。褐色脂肪組織の活性が低下するとエネルギー消費量が減り結果的に肥満すること、逆に褐色脂肪を活性化すれば肥満や関連代謝病を予防・軽減できることを、実験動物のみならず伴侶動物や野生動物をも対象に明らかにしました。さらに、ガンの画像診断法PET-CTを応用してヒトの褐色脂肪を検出・評価できることを、世界に先駆けて見出し、「成人では褐色脂肪は消失しており生理的役割は無い」との従来の常識を覆し、その後の国内外のエネルギー代謝・肥満研究に多大なインパクトを与えました。これらの成果は高く評価され、平成13年に日本栄養・食糧学会学会賞、平成17年に北海道科学技術賞、平成20年に日本肥満学会学会賞、平成29年に日本栄養・食糧学会技術賞などを受賞されています。

社会活動では、日本肥満学会理事、日本栄養・食糧学会評議員、日本獣医学会評議員、日本生化学会評議員、同北海道支部長などを歴任し、平成28年日本肥満学会功労賞、平成30年日本栄養・食糧学会功労賞を受賞されました。

以上のように斉藤氏は、獣医学、医学、栄養学の分野で優れた業績を挙げ、学術の進歩に貢献するとともに、北海道大学獣医学部、大学院獣医学研究科、大学院獣医学研究院において多くの学生・大学院生の教育と指導及び後進の育成に尽力し、本学の発展に対する貢献は極めて大なるものがありました。

略　歴

生　年　月　日	昭和17年11月18日
昭和45年 4月	大阪大学蛋白質研究所　奨励研究生
48年 4月	愛媛大学医学部　講師
49年 5月	愛媛大学医学部　助教授
平成元年 3月	北海道大学獣医学部　教授
7年 4月	北海道大学大学院獣医学研究科　教授
18年 3月	北海道大学大学院獣医学研究科　定年退職
18年 4月	北海道大学名誉教授
18年 4月	天使大学看護栄養学部・大学院看護栄養学研究科　教授
25年 3月	天使大学看護栄養学部・大学院看護栄養学研究科　定年退職
29年 5月	札幌保健医療大学保健医療学部　客員教授
令和 3年 3月	
5年10月	天使大学看護栄養学部・大学院看護栄養学研究科　客員教授

（獣医学院・獣医学研究院・獣医学部）

髙橋（たかはし）　久美子（くみこ）　氏

感　想

このたび、令和6年度の春の叙勲の栄を賜り、身に余る光栄と存じます。これもひとえに多くの皆さまのご指導、ご支援の賜物と心から感謝し、御礼申し上げます。

私は、昭和58年に北海道大学医学部附属看護学校を卒業後、北海道大学医学部附属病院に入職し、定年まで39年間勤務させていただきました。

血液内科・消化器内科病棟、脳神経外科・神経内科病棟、集中治療部・救急部、医療情報部と経験し、患者さんの気持ちに寄り添いながら看護すること、病気や障害を持ちながらも希望に沿った生き方ができるように支えるということを、本当に深く学ばせていただきました。また出会った患者さんやご家族のことは今でも思い出され、私自身の心の支えになっています。集中治療部・救急部では、異常の早期発見・対応により患者さんの状態が安定し回復する姿をみて、高度な専門性を発揮する看護職の必要性を痛感しました。また初めておこなわれた骨髄移植では、高度無菌治療室等の準備段階から関わらせていただきました。医療情報部では、看護部が大切に実践してきた「患者参加型看護」や電子カルテなど、新たにシステム化し運用していく醍醐味や面白さを体感し、システムを使用する「人」を育てる大切さを改めて実感しました。

看護部に入ってからは、次に活躍する看護職員を育てることが自分の役割と考えるようになり、北海道大学大学院保健科学研究院と協働で開催していた「がん看護エキスパートナース養成プログラム」を担当しました。自分が関わった研修を通して成長する看護職員の姿を見て、本当に感動しました。看護部長時代は、新型コロナウイルス感染症対応に追われましたが、多職種それぞれが専門性を発揮し、新たな知見や英知を結集し共に戦ってきました。毎日現場の不満や要望の声を聞き、業務内容や人員配置を検討する日々でしたが、「明けない夜はない」という言葉を胸に、全職員で取り組んできました。その中で看護部をはじめ多くの医師、薬剤師、認定看護師等の協力を得て、特定行為研修を開始することができました。

振り返ると北海道大学病院に勤めていたから経験できたことがたくさんあります。現在私は、公益社団法人北海道看護協会の会長を務めており、北海道大学病院での経験が非常に役立っています。ここでも多くの看護職の方々に支えられて、公益事業を進めています。

最後に改めて、ご指導くださった諸先輩方、同僚、後輩、他職種の方々、また患者、ご家族の皆さまに心から感謝申し上げるとともに、北海道大学、北海道大学病院、看護部のご発展を祈念し、お礼の言葉といたします。

功績等

髙橋久美子氏は、昭和37年2月23日に北海道釧路市に生まれ、同55年3月北海道立釧路湖陵高等学校、同58年3月北海道大学医学部附属看護学校を卒業し、同年4月北海道大学医学部附属病院に採用されました。平成4年4月に副看護婦長、同16年4月に看護師長、同24年4月に副看護部長、同31年4月から看護部長を歴任し、令和4年3月に北海道大学病院を定年にて退職されるまで看護管理・教育の充実に向けて貢献されました。定年退職後は令和4年6月より北海道看護協会会長に就任し道民の健康と福祉の向上に寄与されました。

同氏は採用時以降、血液内科・消化器内科、脳神経外科、集中治療部・救急部、第三内科・血液内科、脳神経外科・神経内科、医療情報部で勤務し、各所での多大な功績が認められ、平成24年より副看護部長に就任しました。北大版看護実践能力開発ラダーの改訂に取り組み、段階的な看護師のキャリア開発に尽力されました。さらに、北海道大学大学院保健科学研究院と協働して、がん看護エキスパートナース養成プログラムを担当し、卓越したがん看護実践能力を持つ看護師の育成に尽力されました。

平成31年4月より第8代看護部長に昇任し、同時に副病院長を兼務されました。令和2年からは新型コロナウイルス感染症の蔓延により、重点医療機関として新型コロナウイルス感染症陽性患者の受け入れに対応し、院内感染を防ぎながら大学病院としての診療を維持するために尽力されました。また、看護師の特定行為研修に係る指定研修機関の準備を進め、令和2年より開講し、特定行為研修修了者の育成に取り組まれました。さらに、北海道初の医療観察法病棟である「北海道大学病院附属司法精神医療センター」の開設に向けて尽力されました。

これらの業績に加え、平成7年4月からは北海学園大学経済学部に入学し、同11年3月に卒業し、同28年に認定看護管理者の資格を取得されました。

社会活動では、北海道看護協会認定看護管理者教育研修講師や札幌市立大学認定看護管理者サードレベル非常勤講師など多数の教育活動に従事し、北海道の看護管理者の育成や質の向上に貢献されました。また、北海道看護協会の広報出版委員、北海道看護協会65周年記念誌準備委員会等を歴任し、多大な功績をあげられています。さらには、令和4年に日本看護協会長賞と北海道社会貢献賞（優良看護職員）を受賞されました。

以上のように同氏は、39年の永きにわたり看護管理、看護師のキャリア開発、教育の充実に尽力し、その功績は誠に顕著であります。

略　歴

生　年　月　日	昭和37年2月23日
昭和58年 4月	北海道大学医学部附属病院看護部看護助手採用
58年 5月	北海道大学医学部附属病院看護部看護婦
平成 4年 4月	北海道大学医学部附属病院看護部副看護婦長
14年 3月	北海道大学医学部附属病院看護部副看護師長
平成16年 4月	北海道大学医学部附属病院看護部看護師長
24年 4月	北海道大学病院看護部副看護部長
31年 4月	北海道大学病院看護部長
31年 4月	北海道大学病院副病院長
令和 4年 3月	北海道大学病院定年退職
4年 6月	公益社団法人北海道看護協会会長（現在まで）

（北海道大学病院）

盛山正仁文部科学大臣が本学を視察

4月6日（土）に、盛山正仁文部科学大臣、文部科学省の池田貴城高等教育局長、西山崇志基礎・基盤研究課長、轟　渉環境エネルギー課長ら10名が本学を視察されました。

最初に、事務局において、寳金清博総長、山口淳二理事・副学長、山本文彦理事・副学長、行松泰弘理事らと挨拶を交わされた後、本学側から、北海道大学における高度半導体人材育成に係る構想及び未来社会の開拓者たる博士人材の育成に係る取組について説明を行い、その後、活発な意見交換が行われました。

次に、創成研究機構化学反応創成研究拠点（ICReDD）を視察され、前田　理拠点長から、計算科学、情報科学が先導する世界最先端の研究の状況と将来的な展望や国際研究拠点形成について説明があった後、文部科学省の支援を受けて建築した化学反応創成研究拠点棟のミックスラボやフュージョンリサーチオフィス、研究設備等を視察されました。

（総務企画部総務課）

寳金総長との意見交換

ICReDDにおける説明の様子

ICReDD視察の様子

新入留学生オリエンテーションを実施

4月3日（水）、4月に入学する外国人留学生を対象として、新入留学生オリエンテーションを開催しました。

このオリエンテーションは留学生が一日も早く北海道大学での学生生活に慣れ、戸惑いや不安を解消し新しい環境へ適応してもらうことを目的としています。オリエンテーションは英語セッション、日本語セッションの2部構成で進められ、35の国と地域から新しく渡日した合計182名の新入留学生が参加しました。

オリエンテーションでは、ラフェイ・ミシェル・ケイ総長補佐の挨拶に続き、留学生相談室のカウンセラーから、日本の学生生活に適応するためのヒントについて説明がありました。その後、北海道警察及び札幌北警察署から日本の交通ルールやサイバーセキュリティについての説明がされたほか、新渡戸カレッジ、先端人材育成センター、情報セキュリティ、北図書館及び保健センターの紹介に加え、サポートデスクのスタッフによる留学生に対する様々なサポートや茶話会、ランゲージコーナーの紹介があり、参加者は熱心に聞き入っていました。

オリエンテーション終了後は希望者に対し、日本語・英語・中国語の3言語でキャンパスツアーを実施し、これから過ごすキャンパスを散策し、構内の施設についての説明を受けていました。

（学務部学生支援課）

新しく渡日した留学生へ歓迎のスピーチをする
ラフェイ総長補佐

札幌北警察署による交通ルールなどの説明

キャンパスツアーで構内の説明を受ける留学生たち

インターンシップ＆就職活動スタートアップガイダンスを開催
～令和6年度キャリアセンター就職ガイダンスがスタート～

キャリアセンターでは、4月19日（金）に「インターンシップ＆就職活動スタートアップガイダンス」を開催しました。

キャリアセンターでは、年間を通じて就職活動やインターンシップに参加する学生へのガイダンスや講座・セミナーを開催しており、年間で延べ約10,000名以上の学生が参加しています。本ガイダンスは、現在の就職活動やインターンシップの状況を伝えるスタートアップのガイダンスとして開催し、オンラインで約340名の参加がありました。

ガイダンスでは、まず亀野　淳センター長が挨拶し、その後、藤井伸之助アドバイザーから、現在の本学の就職状況やキャリアセンターの支援内容等について説明を行いました。

続いて、吉田梨恵インターンシップマネージャーの進行のもと、実際の就職活動の現場で様々な企業・団体の採用に関わる採用コンサルタントを務める、4名の就職情報会社の方にご登壇いただき、パネルディスカッション方式で現在の就職活動や企業側の採用活動について講演を行いました。登壇者からは、数字やデータを用いながら全国と北海道の学生の状況などを比較した分析の解説や、様々な業界の採用活動の実情や裏側についての話がありました。

その後、40分以上にわたって質疑応答を行い、多く寄せられた学生の不安や疑問を解消する場となりました。参加した学生からは、「インターンシップを始めとする就職活動について、企業の方々からの目線で知ることができてとてもよかった」「就活と学業を切り離して考えてしまっていたので、『学びは裏切らない』という趣旨の話に力をもらえた」などの意見があり、勉強や研究と両立しながらの就職活動に対する不安を解消するアドバイスなどの、本学の事情に沿った内容に満足の声がありました。

キャリアセンターでは、インターンシップの支援や学部1年生から活用できるキャリアガイダンスや就職活動に関するガイダンスなど、年間を通じて様々なセミナーを行っています。夜間のオンライン開催などで多くの学生が参加しやすい場を設けるほか、対面での交流機会イベントも増やしていく予定です。また、就職活動について、学生への個別キャリア相談も実施しています。

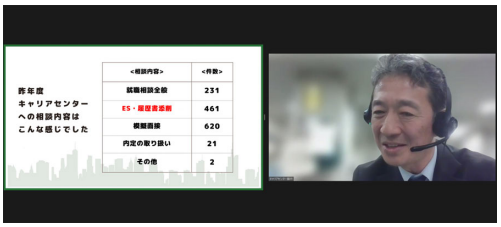
詳細はキャリアセンターのホームページで随時公開していますので、ぜひ学生の方へご案内ください。
https://cc.academic.hokudai.ac.jp/

（キャリアセンター）

日　　時：2024年4月19日（金）18：30～20：30
会　　場：オンライン配信及びオンデマンド配信　※オンデマンド配信について学生はELMSで視聴可能
パネリスト：株式会社ジェイ・ブロード　北海道支社長　菅野万里子　氏
株式会社キャリタス　北海道支社長　松岡孝史　氏
株式会社マイナビ　大学支援推進統括部統括部長　久保潤一郎　氏
株式会社リクルート　Divisiont統括本部HR本部　就職ジャーナル編集長　松田和也　氏
主催・企画・当日進行：キャリアセンター

当日のパネルディスカッション講演配信の様子

配信会場で意見を交わす登壇者



学生からの相談内容について解説する藤井アドバイザー

韓国のソウル大学校と少子化対策連携を強化

3月5日（火）及び6日（水）、北大COI-NEXT「こころとカラダのライフデザイン共創拠点」事業の一環で、社会・地域創発本部の吉野正則本部長・特任教授、高瀬浩樹産学連携研究員、国際連携機構（現：国際連携推進本部）の植村妙菜主任学術専門職の3名が韓国のソウル大学校（SNU）を訪問しました。本学とSNUは1998年以来、毎年交互にホスト校となる形で全学的なジョイントシンポジウムを開催しており、豪州メルボルン大学、米国マサチューセッツ大学アマースト校と並び、本学の戦略的国際パートナー校です。2023年11月に本学で開催した第26回ジョイントシンポジウムに際し、「Forum on the Future for Children（こどもの未来のためのフォーラム）」を同時開催していたことを踏まえ、今般今後の可能性を探る調査を行いました。

一行は、人口統計の観点から韓国政府の少子化政策に関わってきた公衆衛生学院のヨンテ・チョ教授を訪問し、出産家庭への金銭的支援で解決できる段階ではなく、既に国としての人口を担保できない未来がすぐ迫っており、国境を超えた複数国での人材育成と人材流通の流れの整備、産業構造の変革が必要であるとの認識を得ました。また、SNU大学新聞局の担当である国際大学院の韓　定勲（ジョンフン・ハン）教授他1名と学生記者2名との懇談も行いました。

2024年2月までの任期であった経営大学院のテレサ・スンア・チョ教授、3月からの任期である工科大学のジェイ・W・イ教授の前・現国際担当副学長との会談では、異分野融合のコミュニティとの共創研究を作るプロセス、大学としての少子化対策への意義等、幅広く意見交換がなされました。次回こどもの未来のためのフォーラムは、2025年2月に札幌で開催予定です。

（社会共創部社会連携課）

左からイSNU国際担当副学長、吉野特任教授、チョ教授、植村主任学術専門職

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をすることとしています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	（3月31日現在）	47,331件	7,105,510,573円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	（3月31日現在）	10,282件	940,742,016円

ご寄附状況

3月は343件142,571,459円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

医療法人社団青木内科クリニック、医療法人社団いずみ会北星病院、医療法人北翔会、医療法人社団我汝会えにわ病院、NECソリューションイノベータ株式会社、株式会社OHEN、認定NPO法人環境リレーションズ研究所、医療法人社団緩和ケアクリニック・恵庭、医療法人喬成会、勤医協中央病院、株式会社近海食品、医療法人耕仁会、株式会社近藤商会、一般社団法人サステイナブルキャンパス推進協議会、札幌市役所北大土木同窓会、一般財団法人砂防・地すべり技術センター、株式会社JCM、NPO法人　シュマリナイ湖ワールドセンター、株式会社スマートリンク北海道、医療法人清仁会　北海道内科リウマチ科病院、医療法人社団静和会静和記念病院、総合病院浦河赤十字病院、滝上町国民健康保険診療所、月島ホールディングス株式会社、東京オート株式会社、株式会社ドーコン、医療法人社団　苫小牧東部脳神経外科、医療法人社団養生館苫小牧日翔病院、株式会社中島測量設計、社会医療法人医仁会　中村記念病院、中村クリニック、医療法人社団 博仁会 手稲山クリニック、株式会社日立製作所、株式会社福山倉庫、医療法人社団布施川内科医院、社会医療法人平成醫塾　苫小牧東病院、医療法人豊慈会、北海道ガス株式会社、一般社団法人　北海道CGCみどりとこころの基金、社会福祉法人北海道社会事業協会岩内病院、北海道大学校友会エルム、北海道電力株式会社、医療法人社団本間内科医院、社会医療法人松田整形外科記念病院、医療法人社団 水色の木もれ陽 肝臓クリニック札幌、医療法人社団三ツ山病院、茂田石油株式会社、四条はらだ医院、医療法人社団ライフパートナー

寄附者ご芳名（個　人）

合川　正幸	青井　良平	青木　俊介	赤平　幸郎	朝井　克司	安彦かがり	阿部　雅史	池田　幸良
石井　哲夫	石垣　隆弘	石川　　浩	石黒晋太郎	石名坂智秀	磯野　哲郎	磯部　正則	伊丹　儀友
市坂　有基	伊藤　大貴	伊藤　典彦	伊藤　雄三	井上　将希	猪股　路子	井原　　博	今井　　晋
今木　敏明	入澤　秀次	岩井川浩行	上田　雅敏	梅本　由佳	枝澤　　寛	蝦名　康彦	縁記　和也
遠藤　公憲	大田　雅嗣	大野　夏美	大橋　　勉	大畑　　昇	大原　正範	岡﨑　駿志	岡田　厚夫
沖崎　　遼	沖野　太一	奥野　和弘	押久保英夫	小田原一史	乙藤　武志	小原　大和	折原　博樹
角谷　有介	梶原　将弘	柏村　正明	片山　　琢	勝原　孝雄	加藤　伸康	加藤　裕貴	金川　眞行
神山　康明	河本　充司	北河　徳彦	木村　祐介	日下　大器	GOUDARZIHOUMAN	上月　　浩	古梶　正洋
後藤　　猛	小橋　啓司	小林　賢人	駒井　孝博	齊藤惠美子	齊藤　慈円	齊藤　　晋	齋藤　　久
齋藤　雄康	酒井　政雄	坂野　龍一	坂本　大介	崎元　大志	佐々木　朗	佐々木亮子	佐野　淳之

三升畑元基	塩川　哲男	志済　聡子	篠原　正英	新開奈保子	新宮　康栄	菅原　新也	杉江　和男
杉本　　嵩	杉本　　聡	図師　省一	鈴木　貴之	関　　利盛	絶対　零子	瀬名波栄潤	高瀬登志彦
高橋　国臣	髙村　隆太	高柳　　涼	滝沢　　繁	瀧田　千春	田栗　和奈	武田　寿弘	竹田洋一郎
但野　　茂	橘　　孝則	田部　　豊	田村菜穂美	土家　琢磨	土屋　敏彦	寺澤　　睦	照屋　　純
富岡　　悟	豊田　威信	内藤　　亨	内藤八重子	永雄裕美子	中川　　翼	中島　敏夫	中谷　信一
中村　　徹	中村　紀典	庭野　陽樹	丹羽　弘貴	根本　叔治	配島　町子	橋本　浩典	花田　秀一
原　　啓介	樋田　京子	平川　昌文	福士　幸治	福永　悟郎	藤澤　裕子	藤森　寛敏	藤原　滉平
古川夕里香	堀場　聖司	本間　敏美	前田　直音	松井　耕二	松川　敏大	松寺　直樹	松原　謙一
松本　　嶺	真屋　幹雄	三木　證永	三田　勝久	三田村好矩	南田　大朗	宮田　信幸	村井　英樹
村上　泰一	村瀬徳啓充	村瀬　亮太	室井　論大	森田　　肇	矢野　俊介	山崎　領子	山田　浩太
山田　　勉	矢本　沙希	横山　　清	横山　　考	吉田　泰規	吉田　広志	若狭　　哲	若林　髙明
渡部　訓仁	渡辺　義公	渡部　克将					

＜寄附者への特典＞

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年8～9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/ ）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。
https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。
申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ
（https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi）の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ　卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話　2017）

（社会共創部広報課）

「国際雑談～Be the Global Chatter～」を開催

産学・地域協働推進機構は、3月27日（水）に「国際雑談～Be the Global Chatter～」を開催しました。高校生と本学の留学生が英語を用いて交流することによる、異文化理解や英語コミュニケーション能力向上の醸成を目的とした本イベントは、学生団体ARNとBeeber Globalと協働して実施しました。

企画・運営を担当した学生団体ARNは、令和5年度文部科学省のEDGE-PRIME Initiative事業の支援のもとで開催したアントレプレナーシップ教育プログラム「アントレまちなか留学」に参加した高校生で構成され、本イベントは彼らがプログラム内で考案したアイデアを実現したものです。また、Beeber Globalは、国際多文化交流イベントなどの企画、運営を行う本学学生が立ち上げたスタートアップで、本イベントではメンターとして留学生の参加の支援をしました。

イベント内容は、参加者が自然と英語を使えるアイスブレイクを取り入れたり、会話のきっかけとして活用できる話題カードを用意したりするなど、国際交流のハードルを下げて気軽に参加できるよう、高校生ならではの目線で工夫されました。募集数を超える多くの方から参加申し込みがあり、当日は、札幌市内の高校生と本学の留学生を中心に51名が参加し、英語を使ったコミュニケーションで交流を深めました。

参加した高校生からは「同じ高校生の目線で考えられていて、留学生と交流しやすかった。また参加したい」、留学生からは「これまで日本の高校生と関わる機会があまりなかったため、日本文化の理解が進む貴重な機会となった」などの声が寄せられ、大変好評で、次回の開催も決まりました。今後も北海道のアントレプレナーシップの涵養に資するべく、このような取り組みを継続的に実施してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

イベント実施内容

日　　時：令和6年3月27日（水）17:00～19:00
内　　容：高校生と外国人留学生の交流会
参加者数：51名（高校生34名、留学生17名）
会　　場：北海道大学オープンイノベーションハブ　エンレイソウ

会場の様子

アイスブレイクの様子

「社長になって経営してみよう！社会とお金について学ぶ『親子の経済セミナー』」を開催

産学・地域協働推進機構は、3月30日（土）に証券会員制法人札幌証券取引所との共催イベント「社長になって経営してみよう！社会とお金について学ぶ『親子の経済セミナー』」を開催しました。楽しみながらビジネスの仕組みを知り、社会課題の解決方法を考えることをねらいとして企画した本イベントに、小中学生の計16名とその保護者が参加しました。

イベント当日は、初めに札幌証券取引所の鳥居克広氏より「お金」についての講義が行われ、参加者は、お金の役割や使い方、お金がどのように経済と関係しているかについて学びました。その後、本機構が本学学生とともに開発したカードゲーム型教育プログラム「チャレンジ・ピッツァ」を実施しました。「チャレンジ・ピッツァ」は、ビジネス、創造性、主体性を育むプログラムとなっていますが、今回は特に「お金」に着目し、金融教育版として課題カードの内容を変更する等、アレンジした形で、本イベントに取り入れました。参加者は、ゲームの中でピザ屋の経営者となり、材料の仕入、製造、販売を通して社会課題や経営課題の解決を目指しました。ゲームを終えた後、「個人（消費者）」と「企業（経営者）」のそれぞれの立場でのお金の使い方、「欲しいもの」と「必要なもの」の違いについての補足説明を交え、振り返りの活動を行いました。参加者から、「ビジネスとは、“社会の役に立つことを通じてお金を得ること”だと分かった」「色々な失敗があるからこそ成功があることが分かった」などの感想が寄せられ、参加者が社会とお金について学ぶことができたイベントとなりました。

産学・地域協働推進機構では、今後もアントレプレナーシップの涵養に向けて、様々な教育を提供してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

イベント実施内容

日　　時：令和6年3月30日（土）12:30～15:00
参 加 者：小中学生16名と保護者
会　　場：札幌証券取引所・2F会議室（北海道札幌市中央区南一条西5丁目14番地の1）
主　　催：産学・地域協働推進機構、札幌証券取引所
後　　援：株式会社東京証券取引所、HSFC（エイチフォース）、STARTUP HOKKAIDO

カードゲーム「チャレンジピッツァ」

ゲームをしている様子

表彰式の様子

全体集合写真

きたキッチンで「北海道大学フェア」を開催

令和4年から開催し、今回で3回目となる「北海道大学フェア」を、今年も開催しました。今年は3月27日（水）から4月9日（火）までの2週間に渡り、道産食品セレクトショップ「きたキッチン」オーロラタウン店、及び新千歳空港店の2店舗で、北海道大学認定ブランド商品を販売しました。

本フェアは北海道大学、札幌丸井三越、北海道百科、北洋銀行の4者共同企画によるもので、大学が開発に関わった食品等を販売すると同時に、商品開発に至るストーリーや商品に活用されている研究成果を一緒に伝えることにより、商品のPRと大学の研究成果の社会還元を目指しております。

北海道大学フェアでは、数ある北大ブランド認定商品の中から40アイテム以上を出品しました。今回は「北大トラウト」を活用した燻製サクラマス・燻製ヤマメ及び「北大ラズベリー®」を活用したスイーツが初登場しました。また、今回も北海道大学病院栄養管理部と共同開発した、高血圧予防に効果のある食事療法と地中海沿岸諸国の食習慣を掛け合わせたMIND食弁当を提供しました。前半はカフェdeごはん（インフォメーションセンターエルムの森内）とのコラボレーションによる、和風のMIND食弁当が初登場しました。また後半はレストランAri（当別町）とのコラボレーションによるMIND食弁当やピラディーナ、豆乳プリンなどを販売しました。

テレビ局の取材や新聞等でも大きく取り上げられ、MIND食や北大ラズベリーについて、たくさんの反響をいただきました。

今後も、産学・地域協働推進機構では北海道大学認定商品を通じたブランド力の向上と情報発信により、地域との連携と社会貢献に努めて参ります。

（産学・地域協働推進機構）

店舗の様子

北大ラズベリーを活用したスイーツ

札幌キャンパスが自然共生サイトに認定

札幌キャンパスは、3月18日（月）に、生物多様性の保全に貢献している区域として、環境省より「令和5年度後期 自然共生サイト（以下「自然共生サイト」）*1」に認定されました。

札幌キャンパスは約177haの広さを誇り、その自然の豊かさから市民の憩いの場にもなっています。今回、札幌キャンパスのうち建物が集中して建設されている範囲を除いた約126haが「自然共生サイト」に認定され、3月26日（火）、環境省北海道地方環境事務所にて認定証授与式が行われ、横田　篤理事・副学長、農学研究院の愛甲哲也教授・総長補佐らが出席しました。本学としては、令和5年度前期に認定を受けた雨龍研究林に続き、2カ所目となります。

今回の自然共生サイト認定は、「キャンパスマスタープラン2018」において、豊かな生態系・緑地の維持と高度な教育研究活動が両立するサステイナブルキャンパスの理念のもと、札幌キャンパスの生態系・緑地の保全と創出が謳われ、その持続的な保全と管理に向けて令和2年2月に策定された「生態環境保全管理方針」に基づいて、キャンパスの生態系や緑地の保全・管理・モニタリングを行ってきた成果によるものです。

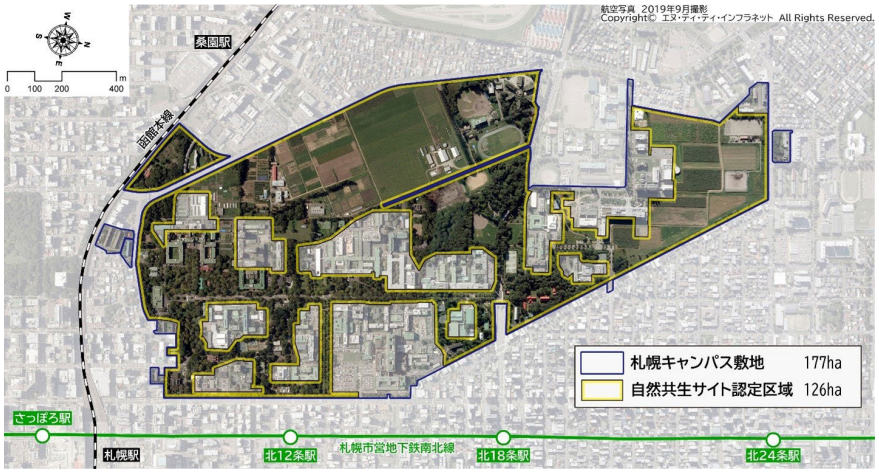
今後、自然共生サイト認定区域はOECM*2国際データベースに登録される予定であり、30by30*3目標達成に直接的に貢献し、2030年までの生物多様性に関する新たな世界目標である「昆明・モントリオール生物多様性枠組」に寄与することとなります。

本学は、世界課題の解決や地域への貢献に向け、知的資産及び物的資産を活用し、30by30目標達成への貢献はもちろん、気候変動対策と生物多様性保全（ネイチャーポジティブ）の両立に向けた統合的なサステイナビリティの推進に引き続き取り組みます。

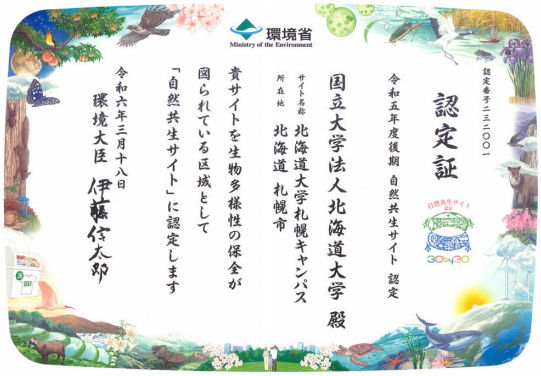
（サステイナビリティ推進機構）

（参考）
令和5年度後期「自然共生サイト」認定結果について（環境省報道発表資料）
https://www.env.go.jp/press/press_02789.html
自然共生サイト「北海道大学札幌キャンパス」詳細資料（環境省自然共生サイト認定サイト一覧）
https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/documents/nintei/R5second01_HokkaidoUniversity_SapporoCampus.pdf

*1 自然共生サイト … 民間の取組によって生物多様性の保全が図られている区域を国（環境大臣）が認定した区域。
*2 OECM … Other Effective area-based Conservation Measuresの略。国立公園などの保護地域以外で生物多様性保全に資する地域。
*3 30by30 … 2030年までに陸と海の30％以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする国際的な目標。



自然共生サイト「北海道大学札幌キャンパス」の認定区域



自然共生サイト認定証

認定証授与式
（左）環境省北海道地方環境事務所長　牛場雅己氏、
（右）横田理事・副学長

ESG（Environmental, Social, Governance）情報の収集及び企業・団体や機関投資家との交流を目的として「日経ESG経営フォーラム」に参加

サステイナビリティ推進機構SDGs事業推進部門は、国内外のESG（Environmental, Social, Governance）情報の収集及び企業・団体や機関投資家との交流を目的として「日経ESG経営フォーラム」の一般会員となりました。大学が本フォーラムの会員となるのは本学が初です。

日経ESG経営フォーラムは、企業・団体が「環境」「社会」「ガバナンス」の観点から持続可能な経営を推進するための各種事業を行うもので、日本経済新聞社グループが主催し、令和6年4月時点で約290の企業・団体が会員となっています。

今後、サステイナビリティ推進機構SDGs事業推進部門は、「日経ESG」誌面での本学の取組み発信やフィナンシャルタイムズ及び日本経済新聞紙面でのロゴ掲出を行うほか、フォーラムが主催する研究会、視察会、ウェブセミナーへ参加し企業・団体や機関投資家からの情報収集やネットワーキングを進めていく予定としており、本フォーラムへの参加を通して、社会とのエンゲージメント及びESGブランドイメージの一層の向上を目指してまいります。

（サステイナビリティ推進機構）

「夢ナビ講義」において新たに研究者8人の講義動画を公開

サステイナビリティ推進機構SDGs事業推進部門では、「夢ナビ講義」において、新たに研究者8人の講義動画を公開しました。

夢ナビ講義は、株式会社フロムページが運営する動画配信プラットフォームで、全国の高校の進路指導や探求学習で活用されています。

今回の公開分を含めて令和6年3月までに、38人の研究者が自身の研究紹介とSDGsとの関わりを解説する動画を夢ナビ講義で公開しているほか、北海道大学×SDGsウェブサイトでも紹介しています。

サステイナビリティ推進機構SDGs事業推進部門では、これからも高校生に向けた研究分野の興味喚起や進学先としての意識醸成を目指した広報活動を続けてまいります。

（サステイナビリティ推進機構）

新たに公開した8人の講義動画（掲載順）

総合博物館　教授　小林快次「恐竜とは？」
教育学研究院　教授　松田康子「問い・学び・応答しつづける」
工学研究院　教授　伊藤真由美「資源の開発・リサイクルと循環型社会～SDGsの関係～」
薬学研究院　教授　小川美香子「光を使ってがんを治す」
保健科学研究院　教授　池田敦子「便利さの裏に潜む環境化学物質が及ぼす影響を大追跡！」
獣医学研究院　教授　石塚真由美「毒をめぐる生物の攻防」
公共政策学連携研究部　教授　池　炫周「東アジアにおけるジェンダーと移民の交差点」
獣医学研究院　助教　矢野（梨本）沙織「動物を知ることでヒトの親子関係・妊娠の謎に迫る」

講義動画へのリンク

新たに8つの分野の研究者が講義を行っている

人間知・脳・AI研究教育センターと大学院教育推進機構リカレント教育推進部がリカレント教育プログラム「AIと人間社会」を実施

令和4年度文部科学省「成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業」として、人間知・脳・AI研究教育センター（以下、CHAIN）が編成組織になり、1月から3月にかけて、リカレント教育プログラム「AIと人間社会」を実施しました。本学が実施する初の本格的なリカレント教育プログラムで、大学院教育推進機構リカレント教育推進部がプログラム実施の支援を行いました。

AI技術に起因して生じうる具体的な諸問題に対処し、AI技術の円滑な社会実装を進めることができる人材の育成を行い、AI時代における開かれた「知」のあり方を準備することが、本プログラム全体の目的です。

本プログラムはオンデマンド講義で実施するコース1a「AI倫理」と1b「AIから広がる知：異分野融合」及び、コース1の受講者を対象に、より踏み込んだ問題意識と解決の視点を養う、3日間の集中講義で行われるコース2「エキスパートコース『AIと人間社会』」で構成されています。

11月1日（水）から12月20日（水）までを募集期間とし、半導体製造、精密機器、情報サービス、マスメディアといった企業の職員のほか、行政職員、大学教員、スタートアップ企業経営者等からも受講申し込みがあり、のべ91名が受講しました。

コース1aと1bは、8回のオンデマンド講義と、講師と直接オンラインで質疑応答をすることができるQ&Aセッション2回を組み合わせた、合計10回のプログラムです。講師はCHAIN所属教員の他、他大学から招聘した大学教員、及び、最新のAI開発やニューロテックを牽引する株式会社アラヤとの連携のもと、2名の実務家教員が参画しました。

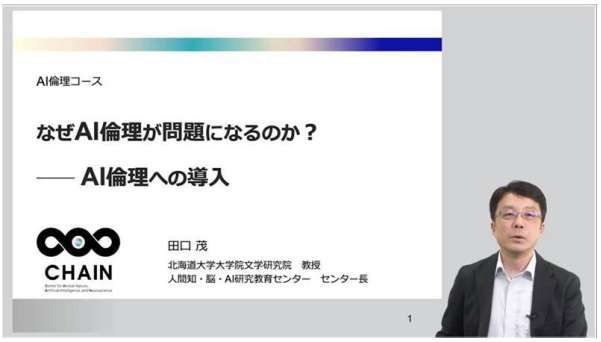
コース1は、1月5日（金）に開講し、3月22日（金）に閉講しました。受講生からは、会社に導入するAIの利用ガイドライン作成のための知識の底上げができた、との感想が寄せられました。

コース2は、FMIフード＆メディカルイノベーションセンターを会場として、3月8日（金）から10日（日）の3日間、開講しました。CHAIN所属教員5名が講師を担当し、アクティブ・ラーニングを中心とした実践的な学習を行いました。コース2の受講はコース1の受講が条件となっており、9割以上の受講生が、コース1の学びを深められたと回答し、意欲のある多様な立場の受講生とディスカッションすることで、新しいアイデアが得られたと好評でした。

（人間知・脳・AI研究教育センター／大学院教育推進機構）

2023年度リカレント教育プログラム「AIと人間社会」コースごとの料金・受講者・修了者

コース名	料金（税込）	受講者数	修了者数（修了率）
コース1a「AI倫理」	44,000円	39名	28名（71.8%）
コース1b「AIから広がる知：異分野融合」	44,000円	41名	34名（82.9%）
コース2「エキスパートコース「AIと人間社会」」	165,000円	11名	11名（100%）



オンデマンド講義動画の一部

グループディスカッションを行う参加者

「国民との科学・技術対話」支援事業　アカデミックファンタジスタ 2023年度は31名の教員が13校に向けて講義を実施

本学の第一線の研究者が、出張講義などを通じて高校生に研究を伝える「Academic　Fantasista（アカデミックファンタジスタ）」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと、2012年度より実施しています。2023年度は、31名の教員が13の中学校・高校を対象に出張または北大での体験講義を行い、およそ1,200名の生徒が参加しました。

本事業は2024年度も実施予定です。今後も、北大時報や北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」、Facebookで講義レポート等を随時更新していきます。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ
https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/

・Facebook
@Hokkaido.univ.taiwa

リサーチタイムズ　フェイスブック

〈2023年参加校〉
北海道札幌南高等学校／北海道札幌北高等学校／北海道札幌国際情報高等学校／市立札幌開成中等教育学校／北海高等学校／札幌日本大学高等学校／札幌龍谷学園高等学校／札幌創成高等学校／北海道岩見沢東高等学校／北海道小樽潮陵高等学校／北海道南茅部高等学校／北海道旭川東高等学校／立命館慶祥中学校

（広報・社会連携本部）

3月21日（木）の北海道新聞朝刊に掲載された2023年度の報告広告

大学院生向けPBL「未来志向ワークショップ～札幌の気候変動と脱炭素アクション～」を開催

教養深化プログラム、サステイナビリティ推進機構SDGs事業推進本部、広報・社会連携本部社会連携部門は、2月26日（月）、3月1日（金）、2日（土）の3日間にわたって、札幌市環境局と共催で、北海道ガス株式会社、学生団体BEASTの協力のもと、大学院生を対象とした「未来志向ワークショップ～札幌の気候変動と脱炭素アクション～」を開催しました。本イベントは札幌市環境局と本学の協働企画で、様々な専門性を持つ大学院生が社会課題の解決を考えることを目的として行ったもので、法学研究科、文学院、工学院、環境科学院から計7名の大学院生が参加しました。

2月26日（月）のキックオフイベントでは、参加者は札幌市の脱炭素の目標や取組を学び、SDG学習カードゲーム「Get the Point」で資源循環を体験しながら交流を深めました。3月1日（金）は北海道ガス株式会社本社に訪問し、札幌都心部の地域熱供給を支える北ガス札幌発電所、中央エネルギーセンターを見学した後、Co-Creationグループワークを行いました。このワークでは、学生だけでなく札幌市職員と北海道ガス株式会社社員が参加し、2つのチームに分かれて「脱炭素で強靭なエネルギー利用を実現するためのアクション」と「札幌市の気候変動に関する広報力向上施策の提案」という課題にそれぞれ取り組みました。3月2日（土）は、それぞれのチームの課題に対するアクションプランを発表し、サステイナビリティ推進機構SDGs事業推進本部の加藤　悟教授、札幌市環境局環境都市推進部環境政策課の富士本雄大氏、青木亨丞氏より講評をいただきました。

参加者のアンケートでは、「多様なバックグラウンドを持つ人たちの相乗効果を実感した。全員が参画しやすい環境づくりが必要で、SDGsはそこから始まるのだろうと勉強できた」「実際にどのような脱炭素の取組みがされているのか（話題提供・サイトビジットなどで）理解を深めたうえで、その課題についてディスカッションに臨めたのが良かった」「ディスカッションでPBLの方法を教えていただきながら取り組めたのも勉強になった」等の声が寄せられました。

教養深化プログラムでは、令和6年度より大学院生の力を社会に活かす社会貢献型授業の開講を予定しており、今後もサステイナビリティ推進機構や広報・社会連携本部と連携し、産学官による共創的な人材育成やワークショップを展開していきます。

（教養深化プログラム、
サステイナビリティ推進機構、
広報・社会連携本部）

札幌市による脱炭素化の取組紹介

中央エネルギーセンター見学

グループディスカッション

集合写真

教養深化キャリアデザインカフェ「地域から未来を拓く～『地域で働く』選択とその魅力」を開催

教養深化プログラムでは、広報・社会連携本部社会連携部門及びサステイナビリティ推進機構SDGs事業推進本部との共催で、2月21日（水）に「教養深化キャリアデザインカフェ：地域から未来を拓く～『地域で働く』選択とその魅力」を開催しました。

本イベントではゲストスピーカーとして、北海道の後志地方に位置する余市町、喜茂別町、ニセコ町で地域おこし協力隊を経験し、現在は様々なフィールドで活躍している本間朋子氏（余市町）、加藤朝彦氏（喜茂別町）、奥田啓太氏（ニセコ町）をお招きし、地域で働くやりがいやその魅力についてご講演いただきました。その後、教養深化プログラムの平川全機特任助教がモデレーターとなり、参加者から寄せられた質問にゲストスピーカーが答える形でパネルディスカッションを実施しました。

このイベントには、地方でのキャリアパスや地域おこし協力隊に関心がある学生や、地域連携に関わる教職員を合わせて27名が参加し、講演後の座談会でも活発な交流や意見交換が行われました。アンケートでは、「地域でいきいきと働く3人のキャリア形成の過程を知ることができた」「地域課題やニーズ、活動内容の話が聞けて参考になった」「地域で働きたいという漠然とした思いはありながらも、今まで見てきたのは学生としての立場からだけで、社会人からのビジネス的な視点を知ることができたのは非常に意義深く、そのために今自分がするべきことも理解できた」等の感想が寄せられました。

教養深化プログラムでは、令和6年度より大学院生が地域貢献に実践的に取り組む授業の開講を予定しており、今後も広報・社会連携本部やサステイナビリティ推進機構と連携し、共創的な人材育成やセミナーを展開していきます。

（教養深化プログラム、広報・社会連携本部、サステイナビリティ推進機構）

講演の様子（奥田氏）

座談会（本間氏）

質疑応答（加藤氏）

パネルディスカッション

水産科学研究院・水産科学院・水産学部及び北方生物圏フィールド科学センターが知内町と三者連携協定を締結

4月10日（水）、大学院水産科学研究院・水産科学院・水産学部（以下、水産科学研究院）及び北方生物圏フィールド科学センターは知内町と、「人材育成に関すること」「養殖漁業に関すること」「種苗生産に関すること」「その他水産振興に関すること」について、相互に連携・協力し、相互の発展・充実を目的として三者連携協定を締結しました。

同日行われた連携協定調印式には、知内町から西山和夫町長、水産科学研究院から都木靖彰研究院長、北方生物圏フィールド科学センターから宮下和士センター長が出席しました。

知内町と水産科学研究院地域水産業共創センターで、令和5年6月に意見交換を行ったところ、知内町では、ウニの養殖漁業が盛んですが、その養殖を支える種苗生産施設が老朽化していること、また、当該施設には生産能力を上回る生産依頼があり、その生産量の多さから、大量斃死が起きた場合における経営リスクについての問題が生じていることが課題として示されました。また、新たに建設する種苗生産施設に、町や漁協の観点だけではなく、水産学の学術的アドバイスをいただきたいと相談がありました。そのほか、知内町では①漁業就業者数の激減、②磯焼けによる藻場の消失、③沿岸漁業での漁獲高の減少といった漁業課題が起こっていることが分かりました。

そこで、新たに建設する種苗生産施設の検討協議会への参加のほか、「養殖漁業：つくり育てる漁業」に取り組み、上記の課題解決に向けて、本連携の締結に至りました。なお、建設後の種苗生産施設では、海岸域を含め本学のフィールドとして活用されることも予定されています。

本連携に先立ち、地域に根ざした人材育成の一例として、本学で活動する博士後期課程の学生を講師とした出前講義等の取り組みも実施してきました。出前講義では、知内中学校で職業意識調査アンケートを行うとともに、アンケート結果をもとに、生徒の水産業に対する意識向上を目指した講義を行いました。出前講義は今後も続ける計画です。

本連携協定によって、地域人材育成への貢献や、教育研究フィールドとして活用することに伴う地域活性化、そして新たなイノベーション創出に繋がることが期待されます。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部・北方生物圏フィールド科学センター）

調印式の様子
（左から、宮下センター長、都木研究院長、西山町長）

第4回 北の森林（きたのもり）サイエンスCAFEを開催

3月30日（土）に、北方生物圏フィールド科学センター北管理部（名寄教育研究棟）の主催で、「北の森林（きたのもり）サイエンスCAFE」を開催しました。4回目となる本イベントには、告知期間が短かったにもかかわらず、北管理部のある名寄市と近隣の美深町、音威子府村から8名が参加しました。

今回のサイエンスCAFEでは、これまでの3回とは趣向を変えて、野外で鳥類をメインとした動植物の観察会を行いました。名寄教育研究棟の周囲には、林木育種試験地などあわせて19ヘクタールの敷地があり、トドマツ・アカエゾマツの採種園（育苗用のタネを採取するために育てている林）をはじめとする森林も育っています。参加者たちは残雪を踏みしめながら、大きな木に集まった多様な鳥類を観察するとともに、小学生が面白い形をした樹木を見つけるなど、新たな視点で自然を楽しんでいました。

観察会後には、育種・育苗の紹介や、室内の実験室や研究室など「大学」としての施設を見学する時間も設けました。そして、コワーキングスペースでくつろいだ時間には、参加者から、今後、夏の時期の構内探索や研究林の職業体験、構内での植樹など、施設やリソースの活用について多くの要望が寄せられ、市内にあるからこそできる体験やプログラムがあることを再発見できました。これからも北管理部では、研究林の魅力や重要性を発信する窓口としての役割を担っていきたいと考えています。

（北方生物圏フィールド科学センター）

鳴き声を頼りに鳥を探す小学生たち

森林に入っていく参加者たち

森林と鳥と人が作ったアート。
発見した小学生が「顔の木」と命名

コワーキングスペースで行われた意見交換会の様子

環境健康科学研究教育センターが令和5年度後期「社会と健康」修了生にディプロマ授与

環境健康科学研究教育センターは、3月19日（火）に令和5年度後期「社会と健康」ディプロマ授与を行いました。今回は1名（保健科学院：曾　怡さん）のプログラム修了生に対して、山内太郎センター長名のディプロマが授与されました。

本プログラムは、北海道大学大学院のすべての学院・研究科に在籍する大学院生に開かれたプログラムです。本プログラムでは、大学院共通授業科目「社会と健康」から5領域20単位以上（うち、必修科目11単位以上）を体系的に学ぶカリキュラムを編成しております。

また、大学院共通授業科目「社会と健康」36科目に加えて、これまでに各学院・研究科が提供する科目、あるいは「社会と健康」として提供されている科目以外の82科目が、ディプロマプログラムへの振替科目として認められています（令和6年4月現在、過年度の科目を含む）。

「社会と健康」領域において、環境要因と健康・予防に関する知識、研究技法を学ぶ意欲がある大学院生に対して、豊かな人間性、高い倫理観及び国際的視野を備え、研究課題に必要なPublic Healthに関わる知識を得るため、科目選択の指針を与えています。本プログラムの指針に沿って科目選択し、単位が認められた学生に対して、「社会と健康」に関する知識と実践教育を受けたことを証明するディプロマを授与します。

「社会と健康」ディプロマは、平成27年3月に第1回目の授与を行い、今回は第11回目の授与となり、累計19名の方がプログラムを修了しました。これまでに、医学院、教育学院、保健科学院、文学研究科（当時）、農学院、獣医学院、工学院所属の学生が参加しており、研究分野の垣根を越えた文理融合型の人材育成となっています。留学生の参加も増え、今後ますます多様な人材の輩出が期待されます。

令和6年度前期「社会と健康」ディプロマプログラムの登録申請は、本年6月末まで受け付けており、本年9月に前期授与を予定しています。

（環境健康科学研究教育センター）

ディプロマを手にする曾さん

脳科学研究教育センター脳科学専攻の開講式を挙行

脳科学研究教育センターでは、4月5日（金）に医学部において、今年度入学した履修学生の開講式を行いました。

はじめに、南　雅文センター長（薬学研究院教授）から、祝辞とともに脳科学専攻の特色ある教育体制や研究指導内容について説明があり、「センターが主催するシンポジウムや合宿研修、修了発表会、指定セミナーなど様々なイベントを通じて、所属部局や出身学部、研究対象、実験手法、職種、課程、学年などの垣根を越えた研究交流を図り、視野の広い専門家となれるよう頑張っていただきたい」との激励がありました。

引き続き、出席したセンター教員と履修学生の自己紹介の後、横澤宏一教務専門委員会委員長（保健科学研究院教授）から、修了要件についての説明と履修に関するガイダンスがありました。

開講式終了後には、同会場にて5年ぶりに新入生歓迎交流会が行われ、参加者は所属部局の違いを超えて情報交換を楽しんでいました。

本専攻には、今年度7名の履修学生（修士課程6名、博士後期課程1名）が加わり、全体では24名の履修学生が在籍することになります。

（脳科学研究教育センター）

南センター長より祝辞

新しく加わった履修学生とセンター教員

研修

令和6年度法人文書管理に関する研修（初任職員向け）

開催期間：令和6年4月23日（火）
開催場所：北海道大学学術交流会館第一会議室及び大学文書館
研修目的：北海道大学採用の初任職員に対して、法人文書管理に関する基礎知識を習得させるとともに、大学文書館公文書室で実施する法人文書の集中管理等について理解を深めることを目的とする。
主催部局：総務企画部総務課

「法人文書管理の概要」受講の様子

大学文書館公文書室収蔵庫を見学
（大学文書館の井上高聡准教授による解説）

大学文書館展示ホールを見学
（大学文書館の山本美穂子特定専門職による解説）

表敬訪問

海外

年月日	来　訪　者	来 訪 目 的
6.4.19	在札幌中華人民共和国総領事館　王 根華 総領事	今後の交流に関する懇談
6.4.22	インド工科大学ボンベイ校　Sudarshan Kumar 国際担当責任教授	今後の交流に関する懇談
6.4.23	駐日アイルランド大使館　Damien Cole 特命全権大使	今後の交流に関する懇談

王 根華 在札幌中華人民共和国総領事館総領事（中央）

Sudarshan Kumar
インド工科大学ボンベイ校国際担当責任教授（左から3人目）

Damien Cole 駐日アイルランド大使（左から3人目）

（国際部国際連携課）

人事

令和6年5月1日付発令

新　職　名（発令事項）	氏　　名	旧　職　名（現職名）
【総長補佐】 （期間：令和7年8月31日まで）	中　山　隆　治	大学院公共政策学連携研究部附属公共政策学研究センター教授

編集メモ

●4月16日（火）から、本学公式クラウドファンディングプロジェクト第6弾が新たに始まりました。
詳細は、QRコードからご覧ください！

北海道大学クラウドファンディング
https://readyfor.jp/pp/hokudai

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は情報基盤センター北館です。
長かった北海道の冬もようやく終わり、今年も見事なしだれ桜が咲きました。
気温も上がり、札幌キャンパスでも春の訪れを感じる日々が続いています。
暖かな日差しの中で光を浴びて揺れる桜の花は、新しい季節の到来を告げるように私たちを照らしてくれます。

キャンパス風景 50 情報基盤センター北館（北11条西5丁目）

北大時報⑤　No.842　　令和6年5月発行

北海道大学社会共創部広報課　〒060－0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL：（011）706－2610 ／ FAX：（011）706－2092 ／ E-mail : kouhou@jimu.hokudai.ac.jp
https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html